# 大正末における石井鶴三と中里介山の関わり
## ――雑誌『婦人之友』と「小野の小町」挿絵をめぐって

松本和也（信州大学人文学部）

### 一、はじめに

二〇一〇年四月、信州大学に「石井鶴三関連資料」三万点超が寄贈された。その中には、一一〇〇〇点あまりの（主には石井鶴三宛）書簡が確認されている[1]（二〇一二年四月現在）。当初から予想された通り、これまでに確認できただけでも、書簡群には石井鶴三が挿絵画家として関わった作家・編集者からの貴重な書簡も多く含まれている。たとえば、鶴三挿絵の代表作（の一つ）である『大菩薩峠』の著者・中里介山（一九八五～一九四四）からのものも、すでに四〇点あまり確認されており、貴重な資料として注目に値する。（もちろん、特定の固有名ばかりに注目するのではなく、書簡群、さらには資料群総体の語る声に耳を傾け、それらを総体として意味づけていくことが長期的な資料整理の目標であることはいうまでもない。）

これまでの整理によれば、石井鶴三宛中里介山書簡および関連書簡は、三つのグループにわけることができる。①『大菩薩峠』連載時の挿絵に関するもの、②『大菩薩峠』の挿絵複製をめぐって両者が対立した「挿絵事件」に関するもの、③その他のもの、である。前二者については、さらなる書簡整理の進展と関連事項の調査が必要であるため今後の課題とせざるを得ないが、本稿ではそれらの前提ともなる、（③に属する）『大菩薩峠』で関わる以前の石井鶴三と中里介山の関係にスポットを当ててみたい。具体的には、挿絵画家・石井鶴三と小説家・中里介山によるはじめてのコラボレーションとなった「小野の小町」[2]をとりあげて、信大蔵「石井鶴三関連資料」から発見された編集者の石井鶴三宛書簡（新資料）を紹介しつつ読みといていくことで、両者の関係を舞台裏の進行とあわせて明らかにしていきたい。

こうした試みは、第一に、ほとんど言及されることのない、『大菩薩峠』や「挿絵事件」以前における、石井鶴三と中里介山の関係を明らかにし、そこから、それ以後の関係（のもつれ）を考えていくための足場を築くことにつながる。第二として、これもほとんど注目を集めてこなかった、挿絵執筆の楽屋裏について、一つの貴重なサンプル・ケースを提出することができる。第三として、前記二点とあわせて、文学者やその作品を中心に構築されてきたこれまでの日本近代文学史（研究）を、挿絵（画家）や装幀（家）、編集（者）など、その重要性にみあう照明を当てられてこなかった領域から、すぐれて物質的・実証的な報告によりつつ相対化する端緒ともなるだろう[3]。

＊

挿絵画家・石井鶴三と小説家・中里介山――この両者の関係について、最もよく知られているのは、『大菩薩峠』におけるコラボレー

ションということになるだろう。『大菩薩峠』は、のべ二九年の長きにわたって書きつがれていった中里介山の代表作だが、比較的初期の「無明の巻」（『大阪毎日新聞／東京日日新聞』夕刊、一九二五・一・六～五・一二）・「白骨の巻」（同前、一九二五・五・一三～八・二七）・「他生の巻」（同前、一九二五・八・二八～一二・二九）・「流転の巻」（同前、一九二六・一・五～五・二〇）・「みちりやの巻」（同前、一九二六・七・一三～一〇・二一）・「鈴慕の巻」（同前、一九二八・五・二二～七・一九）・「Oceanの巻」（同前、一九二八・七・二〇～九・八）の挿絵を石井鶴三が担当している。[4]

このコラボレーションについては、挿絵画家・石井鶴三にとっての代表作の一つということにとどまらず、挿絵（画家／史）全体にとってもエポック・メイキングな仕事として、高く評価されている。[5] ここでは、文芸・美術雑誌の『東陽』において「挿絵特集」が組まれた際の座談会から、富澤有為男の発言を引いておく。

**富澤**　僕なんぞの知る所では、だいたい挿絵と云ふものは画壇からも一般世間からも軽んぜられてゐたとしか思へない。それがこれは大菩薩峠の挿絵に依つて石井さんの御功績だらうと思ふが、あの頃から挿絵が一本立ちになつた。それ以前の事は知らないが、僕達の知る範囲では大菩薩の挿絵が明かに挿絵全体の価格をあげた。[6]

ところが、両者はその後、この『大菩薩峠』をめぐって、介山が鶴三を起訴するところまでいきついてしまう。文学史／挿絵史／著作権（問題）史上において折々とりあげられるこの「挿絵事件」については、次に掲げる新聞記事によって概要が把握できるだろう。少し長くなるが、全文を引いておく。

新聞連載小説の中で、小説と挿絵のどちらが上位に立つか？　今では自動車の両輪のような関係にあると思われる両者の間に、かつて、その地位をめぐる一大論争があった。

東京日日新聞（東日、毎日新聞の前身）の学芸部員だった故・高原四郎さんの関係者がこのほど毎日新聞に寄贈した作家、画家らの未公開書簡の中には、そのことを示す資料が含まれていた。

差し出し人は、大長編小説『大菩薩峠』の作者、中里介山。あて先は東京日日新聞社編集局長。日付は昭和8（1933）年5月26日。書簡の中身は、東日連載中にこの小説の挿絵を描いた石井鶴三が、『石井鶴三挿絵集』にこの時の挿絵を入れることを知った介山が、「著作権侵害」などを理由に、出版しないよう東日を通じ鶴三に投げた、いわばけん制球のようなものだった。

介山は「挿絵は小説という主人公があって生まれた画であり、作者の創作モチーフの分身であるから、自作小説の複製である」と小説上位説に立った。これに対し、鶴三は「小説との文画協力に成る共著作物とみるべきもの」と両者同等のオリジナリティーを主張した。

最初は、けん制にとどまっていた介山だが、挿絵集が刊行されたうえ、他の画家が鶴三を援護したことも手伝い、1934年10月、著作権侵害で鶴三と出版社を相手取って東京地裁に告訴。文壇、画壇を巻き込む論争へと発展した。

介山が、翌35年12月に告訴を取り下げたことで論争は収束

し、小説に従属する空気が支配的だった挿絵の地位はこれを契機に、小説と次第に肩を並べるようになっていった。墨で達筆をふるった介山の書簡からはそんな時代の熱気まで伝わってくるようだ。[7]

もちろん、ことここに至るまでには〝小説の挿絵〟の著作権をめぐる当時の情勢・認識や、それらにも関わる小さなトラブルが蓄積されていたことも事実である。[8] そこで、本稿では『大菩薩峠』以前にまで遡って二人の関係に光を当て、「通俗的な読み物といった次元を脱却していない」[9]などと評されるがゆえにほとんど注目されてこなかった中里介山「小野の小町」をとりあげ、その連載時における、小説家と挿絵画家のコラボレーションとその時期の良好だった関係を検証していきたい。何より、両者の良好な関係なくして、『大菩薩峠』でのコラボレーションなどあり得なかったはずなのだから。

## 二、『婦人之友』をめぐる石井鶴三／中里介山

二人の具体的な接点――中里介山「長編小説　小野の小町」（『婦人之友』一九二二・一～一二、全一二回）に、石井鶴三は挿絵一二点、挿画カット一二点を寄せている。また、連載開始に先立つ社告「明年よりの『婦人之友』」（『婦人之友』一九二一・一二）では、「長篇小説三篇」として、田山花袋「娘達」・加藤武雄「久遠の像」と並んで中里介山「小野の小町」が紹介されており、そこには次のような文章が添えられていた。

絶世の美人とうたはれた小野小町は何んな一生を送つた人であらうか？　たゞ美人といふだけで外には何も分らないやうに思はれてゐるのは小野小町です。歴史小説の飛将中里介山氏が、自ら発見したる史実に潤色を加へ、小町の生立ちからその周囲、信仰、恋愛等、一代の経歴を面白い物語として書かれたものを、本誌新年号から連載します。これ亦決して他に見られない本誌の一異彩だらうと信じます。

ちなみに同作は、四度、単行本化されている。初刊単行本『歴史小説　小野の小町』（總文館、一九二三）では、巻頭に三葉の挿絵が各一ページ大で添えられており、それぞれ石井鶴三による初出時挿絵（五月号・六月号・一一月号）の再掲である。

『婦人之友』6月号挿絵

© Keibunsha, Ltd. 2015/JAA1500047

また、「遊行女」・「星ヶ城夜話」・「愛染明王」・「小野の小町」の四編が収められた短編集である『遊行女』（春秋社、一九三〇）に挿絵は添えられていない。その後、大菩薩刊行会から「小野小町」単独で単行本化された『小野小町』（大菩薩刊行会、一九三三）では、

巻頭に一枚挿絵が添えられているが、初出時の絵とは異なりクレジットもないため、誰の手になるものかは不明である。戦後、中里介山の死後にも、『小野小町』（隣人社、一九四九）が刊行されており（著作権者としては中里幸作がクレジットされている）、こちらにも挿絵は添えられていない（装幀は小坂行人）。

話題を初出誌に戻して、中里介山、石井鶴三ともに関わりのあった『婦人之友』（明治四一年創刊、婦人之友社発行、羽仁吉一・羽仁もと子編集）について、基礎事項をまとめておこう。『日本近代文学大事典』「婦人之友」（田中夏美執筆）では、次のように紹介されている。

> 創刊から現在まで継続して発行された婦人雑誌としては最長の歴史を持ち、主として中流の家庭婦人を対象に、生活に根ざした婦人の人間的自覚を求め「生活即教育」の標語のもとに婦人解放に啓蒙的な役割を果たした。明確な政治的主張はなかったが、羽仁もと子のキリスト教的自由主義にもとづく健全な人生観、社会観を基調にした編集方針で長期の刊行にたえる雑誌の基礎を固めた。[10]

また、竹田喜美子・加藤久絵は、『婦人之友』の特色を以下四点にまとめている。

1、創刊者羽仁もと子が半世紀にわたり自ら主宰してきたこと。
2、キリスト教精神（自由・協力・愛）に基づいた生活思想を堅持して権勢にも世俗にも屈せず、独自の主張を貫き通したこと。
3、同じ思想に基づき自由学園を1921（大正10）年に創設し、日本の教育界に生活教育という独自の境地を根付かせたこと。
4、全国に「婦人之友」の愛読者の集まりである「友の会」を1930（昭5）年に組織し、継続的な読者との協同によって、独自の家庭生活合理化運動を進めたこと。[11]

こうしたポイントをまとめるならば、田中穣が指摘する通り「「婦人之友」は、女性雑誌でありながら、同時に思想・文化・生活までの広範囲の情報を、品位と美を備えた視点から総合的に集めた編集をしつづけた」雑誌なのであり、その意味で「「白樺」と、極めてよく似ている」、つまりは「文学性（芸術性といってもよい）」をもちあわせたユニークな雑誌だということになる。[12]

＊

さて、このような『婦人之友』と石井鶴三の、ごく初期の関わりを示すものとして、信大蔵「石井鶴三関連資料」からは、『婦人之友』社・羽仁吉一からの払出通知表の入った書簡二通（**[書1—87]**）がみつかっている。一通は一九三〇年のものなのだが、[13]もう一通は一九二一年ときわめて早い時期のもので特に注目される。通信事務の書簡は、宛先が「板橋町中丸二六六／石井鶴三様」で、消印はない。差出人は、東京府池袋郵便局（封筒表下部に印刷）である。内容物は払出通知表で、口座番号と加入者住所氏名の行にまたがるように「東京一一六〇〇番／東京府高田町雑司ヶ谷上リ屋敷一一四八／婦人之友社　羽仁吉一」という社印が捺されている。金額は「六円也」と記されており、口座所管願日附印の欄に捺された円形印に

は「10・11・30」の日付けが読みとれる。以上から、右の払出通知表が、以下に述べる、一九二一年に鶴三が書いた童話挿画への執筆料だったと推測される。

石井鶴三の名前が『婦人之友』に数多く登場するようになるのは、「小野の小町」連載の前年（一九二一）からで、童話の装画家としてである。島崎藤村「幸福」（一月号）に四点、秋田雨雀「鳳輦と小鳥の糞」（二月号）に六点、相馬泰三「鐘と水と灰」（三月号）に七点、小川未明「笑はない娘」（四月号）に七点、中村星湖「みをかせだぬき」（五月号）に五点、佐々木指月「乳色の里」（六月号）に八点、野上彌生子「龍宮へ行った娘の話」（七月号）に八点、上司小剣「小さな籠つくり」（八月号）に六点、小川未明「石をのせた車」（九月号）に九点、翌一九二一年にはいって野上彌生子「お婆さんと小豚」（一月号）に一点の、それぞれ挿画を執筆している。その間、それとは別に鶴三は、「迷信」（四月号）・「幕間」（七月号）・「やり水」（九月号）・「夕陽」（一一月号）と題する口絵や画を寄せてもいる。この時期のやりとりがうかがえる資料として、次の葉書がある。

**1、石井鶴三宛安田書簡（仮番号［書7―1120］）**

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

拝
お忙しいところを度々御足労をかけ
まして何とも恐れ入りました。さしあ
の御揮毫たしかに拝受、御蔭で極
めて都合よく参ります、先は取急ぎ御
礼まで　拝具

宛先は、「板橋町中丸二六六／石井鶴三様」、消印の日付は大正一〇年五月六日、午前八時から一〇時である（地名は読みとれない）。差出人は、「婦人之友社内／安田生」とあり、上部に「五日夜」と記されている。「度々御足労」とあることから、右の童話挿絵に関する打ち合わせなどで、鶴三が何度か婦人之友社に出向いていたのだろう。その間に、挿絵の依頼があり、完成した挿絵を渡したと考えられる。このときの挿絵は、日付から「乳色の里」（掲載誌奥付には「大正十年五月二十日印刷納本」とある）のものだと思われる。

その後も鶴三は、『婦人之友』に挿絵・装画の他、エッセイなどの執筆もし、一九二六年からは、吉田白嶺（一八七二～一九四二、彫刻家）らとともに自由学園美術教師となり、塑像を教える（一九三七年まで）ことになり、婦人之友社とは深い関わりをもつことになっていく。[14]

＊

一方の中里介山は、「淀君」（『婦人之友』一九一六・一～一二）が『婦人之友』に作品を掲載したはじめで、その次が一九二三年の「小野の小町」となる。「小野の小町」連載終了後、翌年からは「義朝の子」（『婦人之友』一九二三・一～三、五～七、九）を連載しており、この時にも石井鶴三が挿絵とタイトルカット、各七点を寄せている。

このようにみてくれば、鶴三、介山がともに関わりのあった『婦人之友』というメディアが、二人のコラボレーションを実現させる土壌であったことがわかる。

ここで、中里介山「小野の小町」について基礎事項をまとめておきたい。

すでに紹介した「小野の小町」をめぐる単行本には、戦後版をの

ぞいて、いずれも中里介山による自作解説が付されている。まずは、それらを通覧し、作者自身のねらいを確認しておこう。『歴史小説小野の小町』（一九二三）には、次のような「緒言」がみられる。

この小説は小野の小町に就ての古来の伝説と史実とを消化して、その心理的実在に力を籠めてゐる。小町の名を知る者が彼女の心を知らない。天下第一等の美人として、古今有数の歌人としての小町。天分に於て最も恵まれたものが、結局最も不幸な人間的生涯を終へたことの高調なアイロニーは此の小説が説明し得ると思ふ。

古来の史実と伝説の外、近頃では黒岩周六氏の「小野小町論」に負ふ処が多いことを特に附記せねばならぬ。

大正十一年の暮

武州高雄山妙音谷艸庵にて

著　者

つづいて、『遊行女』（一九三〇）の「序」で、「史実及び伝説等の渉猟に至つては、いづれも、相当にゆるがせにはしなかつたつもりである」という介山は、収録作品それぞれについて自負を語っている。「小野小町」については、「「小野小町」のうち深草の少将を深草の帝と見たのは黒岩氏の前人未発の卓見であるが、小町の生活をかういふ風に心理的に見た作物は本著以前に無かつたとは云へる」と、その特異点を強調している。

大菩薩刊行会版『小野小町』（一九三三）に付されている「序」も、以下に全文引いておく。

「小野小町」は天下第一等の才貌を恵まれたる人が、何故に最も不幸なる生涯を終りしかの消息を写したものであつて、深草の少将を深草の帝と解釈したのは黒岩周六氏の卓見に依り、尚幾多の諸書を参考にしてゐる、小町を主材にした作物は古来少くはないが、斯ういふ風に心理的にうつしたものは本書を最初のものと見て差支あるまい、これは、一度単行本として出し、その後「遊行女」と題する一冊のうちへ抱容したが、こんど又分冊して、大菩薩峠刊行会より発行することになつたものである。

昭和八年盛夏

著　者

総じて、重要な示唆を受けた先行作品として黒岩涙香『小野小町論』をあげながら、介山は小町の真実‐心理に迫った筆致を、自作のユニークな特徴として再三アピールしている。

ここで介山がふれている黒岩涙香『小野小町論』（『淑女かゞみ』・『婦人評論』一九一二・九～一九一三・四→朝報社、一九一三）については、「涙香の小町論は、小町の歌を男性を拒否する歌と解釈するところに根拠を置いている」と指摘する錦仁によって、「小町は、男のプロポーズを拒否し、貞操を堅く守った。美人であり才媛（さいえん）であるだけでなく、道徳・貞操観念が強かった」と、その小町像がまとめられている。[15] こうした特徴が端的に示されているのが、『小野小町論』結末に置かれた次の一節である。

小町の生涯は、今より見れば必ずしも実ならぬ花では有りません、一夫にだも見えざる真の貞操の心を以て千古の淑媛と云

ふ活きた手本を不朽に伝へ得た事は、或意味に於て実に大なる実を結んだのであります、[16]

ただし、有元伸子に「深草少将を深草の帝と解釈する点は、介山自身も解説するように涙香論を引き継いでいるが、小町の描き方自体は、涙香や芥川とは全く異なっており、むしろ後述する三枝和子の小町像と通ずるものがある」という指摘がある。近代文学史における小町の系譜を、その差異／同一性からたどることは本稿の域をこえるが、介山の「小野の小町」を「幻想的な趣向もこらした歴史小説」とも評する有元は、その特徴を「平安初期に実在した小町を歴史的に復原しようとするのと同時に、後世に流布した小町説話をもできるだけ取り込む、という欲張った試みをしているところ」にみている。[17]

いずれにせよ、「小野の小町」とは、介山がかなりの意欲と自信をもって書き、四度も単行本化された作品なのであり、一九二二年における『婦人之友』連載は挿絵画家・石井鶴三との出会いという意味でも、双方にとって重要なモメントとなったのである。

## 三、信州大学所蔵「小野の小町」関連書簡

本節では、信大蔵「石井鶴三関連資料」から、「小野の小町」連載に関わる書簡を紹介しながら、その前後の事情を補足することで、雑誌編集／挿絵執筆の楽屋裏を探っていきたい。まずは、簡潔な事務連絡と思われる葉書からみていこう。

### 2、石井鶴三宛婦人之友社編輯局書簡（仮番号［書1―110］）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

拝復
小町さしゑありがたく存じ
ました。
取あへずお礼まで。
十月十三日

宛先は「府下板橋町中丸／二六六／石井鶴三様」、消印の日付けは大正一一年一〇月一四日、地名は小石川である（時間は読みとれない）。差出人は紫色の社印で「東京雑司ヶ谷上リ屋敷／婦人之友社編輯局／電話番号　五二五八番／五六九八番」と記されている。

内容は、「小野の小町」挿絵を受けとったという連絡状なのだが、日付けが書かれていることで、雑誌制作と挿絵執筆をめぐるスケジュールの一端を垣間見ることができる。鶴三サイドの資料がないので、いつ書きはじめて送ったものかは不分明だが、おそらく右の挿絵を掲載したと思われる『婦人之友』一一月号の奥付には「大正十一年十月二十五日印刷納本」とあるから、印刷の一〇日ほど前には、編集局に届けられていたことがわかる。

### 3、石井鶴三宛河井酔茗書簡（仮番号［書7―1115］）

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

拝啓
おハガキありがたく存じ候、スケッチ是非頂
きたく候、目下のところ手もとにある分は、日

野春、同日（織田）、榛名、碓氷（坂もと）だ
けに候、何卒二枚ばかり何処にてもよろし
く御執筆下され度候、十四日までに表
記へおとゞけ下され度候　なるべく石版にします
石版または凸版

宛先は「市外／板橋、字中丸二六六／石井鶴三様」、消印の日付は大正一一年四月一〇日、午後四～五時、地名は小石川である。差出人は「市外、雑司ヶ谷／千百四十四／河井酔茗」、上部に「十日午前」と記されている。

この書簡は、前年から鶴三が『婦人之友』に書いていたスケッチ（挿画）執筆の依頼状である。この時期、鶴三は「小野の小町」の挿画と並行してスケッチも描いていたのである。二行目にある、鶴三発葉書の内容は不明だが、文面からはスケッチ執筆を引き受ける旨のものだと推測される。編集サイドとしては、他の画家にも依頼していたスケッチのストックが減ってきているという事情をうけて、五日ほどで二枚の執筆を依頼している。また、印刷方法についても情報が添えられており、これは鶴三がそれをふまえて構想を練る、ということでもあるだろう。

次の葉書は、「小野の小町」挿絵とスケッチの両方に言及した、やはり河井酔茗からのものである。

**4、石井鶴三宛河井酔茗書簡（仮番号［書7―1117］）**

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

拝啓
此間は失礼、別封で小町の校正刷を
送りました、画をおねがひいたします
五日までに頂きたいとおもひます、六日に
私の方から使ひを差上ます、何うかお渡し
下さいますやうにねがひます
スケツチの方は本月中に自宅（雑司ヶ谷千百
四十四）の方へ御郵送ねがひます

宛先は「市外／板橋町中丸六十六／石井鶴三様」、消印の日付は大正一一年四月二八日、午後七～八時、地名は小石川である。差出人は、紫色の社印で「東京雑司ヶ谷上リ屋敷／婦人之友社編輯局／電話番号　五二五八番／五六九八番」と捺され、「河井酔茗」と万年筆で添えられている。その上部には、「二八日」と記されている。

二行目に「此間は失礼」とあるように、この間、『婦人之友』サイドと鶴三のあいだでは、さまざまなやりとりがあったものと思われる。従って、この書簡で話題になっているスケッチが、**書簡［書7―1115］**で話題とされていたものと同一かどうかは、判断できない。いずれにせよ、挿絵とカットを並行して依頼・執筆していたことは確かである。

この書簡で重要なのは、鶴三が「小野の小町」挿絵を描く際に、小説本文（校正刷）を読んでいたことと、一週間程度という具体的な挿絵執筆期間が確認できることである。これが基本的な依頼・執筆のサイクルだとするには事例が少ないが、そのように仮定するならば、月末に校正刷が鶴三のもとに届き、翌月上旬までに描きあげていたことになる。そうであれば、月によって前後することもあったにせよ、**書簡［書1―110］**とも整合性がとれる。次の葉書も、右

のように推測したサイクルの傍証ともなるだろう。

**5、石井鶴三宛河井酔茗書簡（仮番号［書7―1116］）**

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

拝啓
先日は失礼、眼がおわるいさうですが
お大事になさい、画は八日に使ひをさ
し上ます、何うか小町の分をお渡し
下さい
近郊のスケッチは若しお出来になつてゐ
ましたらお渡し下さい、おねがひいたします
河井酔茗

宛先は「市外／板橋町、中丸二六六／石井鶴三様」、消印の日付けは大正一一年五月六日、地名は小石川である（時間は読みとれない）。差出人は「婦人之友社／河井酔茗」、上部に「五月六日」と記されている。

ここでも話題となっている「小野の小町」挿絵について、「使ひ」が上旬である「八日」にとりにいくといっている。おそらく、前月末に校正刷が届き、鶴三はそれから挿絵を執筆したと推測される。また、並行した依頼していたスケッチについては、「小野の小町」挿絵との間に、明確な優先順位が、はからずも示されている。他の執筆者もおり、雑誌上の特定の場所に必ず求められるわけではないスケッチについては「若しお出来になつてゐましたら」とされており、連載小説挿絵の優先順位が高く設定されていることは、婦人之友社とすればは当然のことでもあろう。

「眼がおわるいさう」ということとも関わるのだろうか、この月は、先に推定したサイクルに比して、やや遅れ気味の日程で挿絵を描いていたとみられる。

同様の、雑誌編集進行上における時差については、次の葉書にも明らかである。

**6、石井鶴三宛河井酔茗書簡（仮番号［書7―914］）**

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

小町の絵ありがたう、カツトは二
三日おくれてもよろしいのですから
郵便でお出し下さい
雑誌は途中ふん失とおもひます
今日改めて一冊御送りいたします
十一日午後
河井酔茗

宛先は「市外／板橋字中丸二六六／石井鶴三様」、消印はうすくて読みにくいが、「七月一一日、午後一〇～一二時」、地名は小石川とあるのが確認できる。差出人は紫色の社印で「東京雑司ヶ谷上リ屋敷／婦人之友社編輯局／電話番号　五二五八番／五六九八番」と捺され、上部には「七月一一日」と記されている。

これも、「小野の小町」挿絵拝受の連絡であり、先の書簡よりもさらに遅めとなっているが、月の上旬に挿絵が編集局にわたり、それから月末の製版・印刷をへて、雑誌刊行というサイクル自体は守ら

れている。そのことと同時に、やはりカットはそれに比して、「二三日」遅くてもよいという連絡が添えられており、編集上の優先順位が確認できる。

また、鶴三の挿絵掲載誌が届かず、再送する旨もあわせて連絡されている。

＊

この時期については、鶴三サイドに日記等の資料がないため、厳密な裏付けをとっていくことは難しい。それでも、今回紹介した六通の書簡によって、「小野の小町」連載時期の、『婦人之友』編集や挿絵執筆の楽屋裏の輪郭は明らかにできたのではないかと思う。今後も「石井鶴三関連資料」の整理や、関連資料のリサーチに努め、より具体的なかたちでこの間の事情が明らかにしていければと考えている。

## 四、石井鶴三と中里介山の関係

本稿「一、はじめに」でもふれたように、石井鶴三は「無明の巻」から中里介山『大菩薩峠』の挿絵に関わることになったのだが、作品自体はそれに先だって、一九一三年九月一二日から『都新聞』紙上で連載がスタートしていた。ここで、新聞・雑誌での連載に際して関わってきた挿絵画家をあげてみるならば、井川洗厓、石井鶴三、金森観陽、中村岳陵、硲伊之助、伊東深水、矢野橋村といった名前が並ぶことになる。

さて、石井鶴三はといえば、「小野の小町」連載に前後して、上司小剣『東京（愛慾編）』（『東京朝日新聞』一九二一・二・二〇～七・九）において挿絵画家としてのキャリアを本格的に歩みはじめていた[18]。その上での『大菩薩峠』におけるコラボレーションについて、当事者の回想を二つみておきたい。一つは、石井鶴三「『大菩薩峠』挿絵を描いた頃」で、以下に全文を引いておく。

大菩薩峠挿絵は、私が所謂髷物と称する、時代物挿絵を描いた最初である。それまで幾つか挿絵は描いたが皆現代物ばかりであった。だから髷物は到底描く自信はなかったので、新聞社から此挿絵を頼まれた時当然ことわった。然るに頼みに来た記者はひき下がらないで、私が描けないと云うに、「いやあなたは描けますすよ。大毎東日と云えば大新聞ですよ。その大新聞が描けない人に頼みに来ますか。描けると見込みをつけたから頼むのですよ。」と云った。「それでは一つ新しい勉強をするつもりでやって見ましょうか」と引受けた次第。だから自分としては此挿絵では異常に勉強したものである。幕末時代に就いて全く泥縄的の勉強で毎日挿絵を描いて行った。素描もそれまでの洋画風を廃して和紙に毛筆で試みた。こういうわけで自信もなくて描いた挿絵が意外にも評判がよかった。だが自分としては汗背ものなのである。[19]

ここで話題にあがった記者だと考えられる新妻莞は、この時のことについて、「挿絵事件」の中心ともなった書物においてではあるけれど、次のように回想している。

顧ると十年の昔、まだ高尾の山荘に居られた中里介山氏を訪うて、小説『大菩薩峠』の再現を乞ひ、大阪毎日・東京日日両紙上を飾ることゝしたその時から、私は作家中里氏と画家

石井氏の間をつなぐ絆を以て任とし、何としてゞも、両氏のお気持がピタリと合ひ、よりよき作とよりよき絵を世に提供し得るやうと、それを唯一の楽みに最善を尽したのでした。そこに生れた小説『大菩薩峠』と挿画『大菩薩峠』とが、いかに立派なものであるかは、こゝに私が喋々するまでもありません。けだし中里氏と石井氏は舞台に踊る優人であり、私は出方であり、楽屋の走り使であつたのです。[20]

こうして、今度は掲載紙の新妻莞が二人のあいだに入るかたちで、挿絵史上のエポック・メイキングともなる『大菩薩峠』が成立していくのだが、なぜ石井鶴三に白羽の矢が建てられたのかはわかっていない。もちろん、自作を大衆小説一般からは差異化して位置づけようとしていた介山が、挿絵専門の画家より本画家を望んだことはあっただろう。この間の事情について、尾崎秀樹は（可能性を含めて）次のように記述している。

> 画家の人選については、都新聞以来のコンビである井川洗厓をはじめ、永田錦心、小杉未醒などの名前があがったが、最終的には石井鶴三にきまった。〔略〕介山も石井鶴三の画業に注目していたのだろうか、その線でまとまり、翌年一月からの連載開始となる。[21]

本稿で検証してきた通り、『大菩薩峠』以前から中里介山は、自身の小説が石井鶴三の挿絵によって彩られる体験を『婦人之友』誌上で積んできている。鶴三挿絵に対する直接の批評は確認できなかったものの、中里介山が石井鶴三（の挿絵）を高く評価していたことをうかがわせる書簡が、信大蔵「石井鶴三関連資料」から一通発見されている。

**7、石井鶴三宛河井酔茗書簡（仮番号［書4―242］）**

書簡本文の翻字は、以下の通りである。

拝啓、本日はわざ〳〵御とゞけ下さいま
してありがたく存じます、頂戴にあがる筈
でしたに恐縮です
大変におもしろい画でけつこうでした。中
里氏も一度貴方にお目にかゝつて話したいとい
ふ事でした。若し御序におたづね下され
ば好都合です、早々

宛先は「府下／板橋町字中丸二六六／石井鶴三様」、消印の日付は三月一四日、地名は京橋、午後八～九時である。差出人は「婦人之友社／河井酔茗」、上部に「十四日」と記されている。消印の年次は、十の位が「一」であることは確認できるのだが一の位がよみとれず、本文にも記載がないために、未詳とせざるを得ない。ただし、差出人や文面から考えれば、「小野の小町」や「義朝の子」連載期（一九二一～一九二二）のものであるとみて、まず間違いないだろう。[22]

文面から直接確認できるのは、編集者が鶴三の挿絵を高く評価していたことと、介山が鶴三との面会を希望していたことである。大衆文学に関する発言などから推測される介山の性格を考慮すれば、少なく見積もっても挿絵に一定(以上)の評価をしていなければ、面会を希望するということは考えにくい。そうであれば、『婦人之友』

誌上でのコラボレーションは、こうした信頼関係を二人にもたらしたのであり、そうした土壌が、『大菩薩峠』でのコラボレーションを成立させる前提条件ともなっていったのだ。それが後に、あるいはそれSSSS(1)

寄贈の経緯、資料概要、ならびにこれまでの整理報告については、『信州大学附属図書館研究』創刊号（二〇一二・三）所収の各論を参照されたい。

(2) 小説タイトルは、本稿が『婦人之友』初出版を中心に据えていることから、原則として「小野の小町」とし、単行本は二重括弧に入れ、戦後のものは『小野小町』と表記する。

(3) 拙論「石井鶴三宛書簡の整理をはじめて――挿絵（画家）から近代文学・出版（研究）を考え直すために」（『信州大学附属図書館研究』二〇一二・三）参照

(4) （石井鶴三のものに限らず）『大菩薩峠』の挿絵に関して、神保朋世「大菩薩峠挿絵変遷史話」（『文芸』一九五六・四臨時増刊号〔中里介山大菩薩峠読本〕）、渡辺圭二「『大菩薩峠』の挿絵」（『解釈と観賞（別冊）』一九九四・一）参照。

(5) 鶴三挿絵への評価に関しては、拙論「挿絵画家・石井鶴三とその評価」（信州大学附属図書館編『時代小説作家と挿絵画家・石井鶴三』展・資料集』信州大学附属図書館、二〇一二）参照。

(6) 井川洗崖・石井鶴三・岩田専太郎・木村荘八・河野通勢・小杉放庵・名取春仙・林唯一・宮本三郎・須藤重・中島重太郎／牧野吉晴・富澤有為男・花岡乾太郎・松室重行「挿絵座談会」（『東陽』一九三六・九）

(7) 有本忠治「文化という劇場　中里介山の書簡が語る小説と挿絵の上位論争」（『毎日新聞』二〇〇三・一〇・五）

(8) 大貫伸樹「イラストレーションはだれのもの　新しい挿絵時代の幕を開けた石井鶴三『大菩薩峠』の挿絵」（『図書設計』二〇〇八・六）、紅野謙介「このテクストは誰のものですか――一九二〇～三〇年代における検閲と著作権をめぐって」（『語文』二〇一〇・三）参照

(9) 松本健一『中里介山』（朝日新聞社、一九七八）

(10) 田中夏美「婦人之友」（日本近代文学館編『日本近代文学大事典　第五巻』講談社、一九七七）

(11) 竹田喜美子・加藤久絵「『婦人之友』にみる生活改善運動（1919-1933年）の展開〈その1〉――中流階級の暮らしに与えた影響――」（『学苑』二〇〇八・九）

(12) 田中穣『田中穣が見た羽仁吉一・もと子と婦人之友社100年』（婦人之友社、二〇〇三）

(13) こちらも『婦人之友』関連の払出通知表である。差出人は東京府板橋町大字下板橋三、二七九番地／板橋郵便局」で、消印の日付けは昭和五年六月三日、地名は板橋、時間は午前九時～一二時である。発行者は「東京府高田町雑司ヶ谷上リ屋敷一一四八／婦人之友社／羽仁吉一」で、払出通知表の金額は「参拾円」と記されている（口座番号・加入者住所氏名の社印は大正一〇年のものと同一）。

(14) 鶴三と自由学園の関わりについては、出口智之「高村光太郎と石井鶴三――信州大学蔵新出高村光太郎書翰から」（『信州大学附属図書館研究』二〇一二・三）も参照

(15) 錦仁『小町伝説の誕生』（角川書店、二〇〇四）

(16) 引用は『明治文学全集47黒岩涙香集』（筑摩書房、一九七一）による。

(17) 有元伸子「小町変奏――近代文学にみる小野小町像の継承と展開――」（山根巴・横山邦治編『近代文学の形成と展開』和泉書院、一九九八）。ちなみに、ここで言及されているのは、三枝和子『小野小町「吉子の恋」』（読売新聞社、一九九二）である。

(18) この間の事情を、鶴三挿絵との関わりから検証した、荒井真理亜「上司小剣『東京』（四部作）の成立過程――上司小剣宛石井鶴三書簡の紹介」（『日本近代文学館年誌　資料探索』二〇一一）参照。

(19) 石井鶴三「『大菩薩峠』挿絵を描いた頃」（『文芸　増刊号「美術読本」』

一九五五・一一／引用は『石井鶴三全集　第一〇巻』形象社、一九八八）

(20) 新妻莞「序に代へて」（石井鶴三『石井鶴三挿絵集　第一巻』光大社、一九三四）

(21) 尾崎秀樹『峠の人　中里介山』（新潮社、一九八〇）

(22) 鶴三・介山の対面として確実に確認できるのは、石井鶴三「大菩薩峠行」（『婦人之友』一九二六・八／『石井鶴三全集　第三巻』形象社、一九八六）にも記された、一九二六年五月二五日である。

※本稿で紹介した鶴三宛書簡の翻字にあたっては、荒井真理亜氏・髙野奈保氏・多田蔵人氏・出口智之氏の多大なお力添えを頂きました（もちろん、本稿の文責は松本にあります）。また、資料整理に際しては、折井匡氏・後閑壮登氏をはじめとした信州大学附属図書館のみなさまにたいへんお世話になりました。ここに記して謝意にかえさせていただきます。

※本稿は、信州大学・平成24年度若手研究者萌芽研究支援事業（研究課題名「挿絵著作権をめぐる石井鶴三・中里介山の論争への新視点―信州大学受贈資料の整理から」）による研究成果の一部である。